

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 7 日現在

機関番号：34315

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2013～2014

課題番号：25884078

研究課題名(和文) 戦後日本ジャーナリズムと知識人の思想史研究

研究課題名(英文) Study of History of Ideas of Journalism and Intellectuals in Post-War in Japan

## 研究代表者

根津 朝彦 (NEZU, Tomohiko)

立命館大学・産業社会学部・准教授

研究者番号：70710044

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：戦後日本のジャーナリズムで活躍した知識人の研究として、「戦後京都学派」の中心人物であった桑原武夫と多田道太郎の2人の研究を進めた。特に京都大学人文科学研究所の学際的研究を牽引した桑原武夫の思想史研究を開拓することができた。またジャーナリズムと親和性の高い自由主義の思想を多田道太郎の側より掘り下げ、戦後の論壇ジャーナリズムを主導した総合雑誌『世界』、共同通信のジャーナリスト原寿雄からジャーナリズムの思想を追究した。

研究成果の概要(英文)：As part of the research into intellectuals who flourished in journalism in post-war Japan, I studied the researches of Takeo Kuwabara and Michitaro Tada, who were the central figures of "Post-war Kyoto School." Especially, I was able to cultivate Takeo Kuwabara's research into the history of thought, which led the interdisciplinary studies at Institute for Research in Humanities, Kyoto University. In addition, I delved into the doctrine of liberalism, which has a strong affinity for journalism, from the viewpoint of Michitaro Tada, and pursued the philosophy of journalism with reference to the comprehensive magazine "Sekai," which spearheaded post-war thought-provoking journalism, and the journalist Toshio Hara of Kyodo News.

研究分野：戦後日本のジャーナリズム史

キーワード：桑原武夫 多田道太郎 戦後思想 論壇 ジャーナリズム

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 筆者はこれまで戦後『中央公論』と論壇の研究を行ってきた。その成果は博士論文「戦後「論壇」における『中央公論』のジャーナリズム史研究」と単著『戦後『中央公論』と「風流夢譚」事件「論壇」・編集者の思想史』にまとめられた。そこでは元中央公論社・元岩波書店の編集者、元学芸部の新聞記者、元書評紙の編集者などへの聞き取り、中央公論社の内部資料、総合雑誌、書評紙を始めとする文献資料を活用して編集者の思想を解明し、体系的な先行研究が乏しい戦後「論壇」史研究に新しい研究領域を切り開いた。

(2) しかし戦後日本のジャーナリズム史研究においてこの研究は折り返し地点にすぎず、その片面たる執筆者の知識人研究を行う必要があった。これまで日本近現代の知識人研究は、総じてどちらかといえば二次資料に基づき、対象とする知識人も「大知識人」が中心であり、一次資料の発掘からする歴史学研究的な追及と、多様な知識人の実体を位置づける重層性において大きな課題が残るものであった。

## 2. 研究の目的

(1) 戦後日本におけるジャーナリズムと知識人の思想史研究を通じて、ジャーナリズムとアカデミズムの相互作用とその関係の歴史研究に知識人が果たした役割を明らかにする。具体的にはジャーナリズムとアカデミズムを結ぶ知識人を多く擁した京都大学人文科学研究所や東京大学新聞研究所といった場に着目し、桑原武夫など知識人の思想史研究を行うことで、ジャーナリズムと知識人の間に生まれるダイナミズムを歴史的に位置づける。

(2) なかでも学際的な共同研究をプロデュースし、多士済々の知識人たちを統括し、ジャーナリズムで積極的に活動した桑原武夫を位置づけるためには、いまだ明らかにされていない彼の思想形成を研究する必要がある。京都での学生時代からフランス留学、戦前・戦中までの桑原の思想形成を解明することで、ジャーナリズムとアカデミズムを結びつける人間資質の実証研究を行うことを目的とする。

## 3. 研究の方法

(1) 桑原武夫の戦前・戦中までの思想形成を明らかにし、彼がジャーナリズムとアカデミズムを結ぶアカデミック・プロデューサーとなりえた資質の実証研究を行った。主要な資料は『桑原武夫集』全10巻(岩波書店、1980～1981年)と『桑原武夫全集』全7巻(朝日新聞社、1968～1969年)を用いた。特に『桑原武夫集』に所収の自伝的な文章「思い出すこと忘れえぬ人」、「大正五十年」と、東洋史学者で桑原武夫の父親である桑原隆

蔵の回想記などの事実関係を精査し、一次資料を比較検証しながら、桑原武夫の思想形成に迫った。この他、桑原の親友であった詩人の三好達治との戦前戦中の往復書簡を収めた『詩人の手紙 三好達治の友情』も重要な一次資料として活用した。また桑原は京都一中、第三高等学校、京都帝国大学文学部文学科(フランス文学専攻)で学生時代を過ごした。従って『京都一中洛北高校百年史』(1972年)、『紅萌ゆる 第三高等学校八十年史』(講談社、1973年)、『京都大学文学部五十年史』(1956年)、『京都大学百年史』(1997～2001年)などの校史・大学史と、桑原が思想形成をなした地域・時代に関連する京都市〔編〕『京都の歴史』8～9巻(学芸書林、1975～1976年)や南博ほか『大正文化 新装版』(勁草書房、1987年)等を読み込み、桑原の人間形成を多角的に掘り下げた。

(2) その他の論文に関して「『世界』編集部と戦後知識人」では『世界』の各時期の記念号、「多田道太郎の自由主義」では『多田道太郎著作集』全6巻(筑摩書房、1994年)と多田が編集した『自由主義 現代日本思想体系18』(筑摩書房、1965年)、「戸坂潤」では『戸坂潤全集』全5巻(勁草書房、1966～1967、1979年)と『回想の戸坂潤』(勁草書房、1976年)を主な分析対象とした。

## 4. 研究成果

(1) 「桑原武夫の思想形成」では彼の幼年期、錦林小学校時代、京都一中時代を桑原の自伝的著作や、関連文献の証言から思想形成を位置づけ、後の共同研究のコーディネーターの資質に関する社会的でユーモアをもつパーソナリティと、すでに第三高等学校でフランス語を学ぶ前からその素養が認められたことを明らかにした。

(2) 「桑原武夫の戦後思想」では、桑原の代表作である「第二芸術」、「文学入門」、共同研究『ルソー研究』らが戦後初期に集中していることに着目し、その戦後啓蒙期に彼が発した戦後思想を検討した。具体的には桑原が戦後啓蒙期に発揮した批判精神は、戦争中の不満とともに、ある種の「悔恨」の表現に近い社会的責任感に根差すものであり、日本の現実を見据えた上で自ら明晰な言論の実践をもって克服しようとしていたことを明らかにした。

(3) 「『世界』編集部と戦後知識人——知的共同体の生成をめぐる」では戦後の総合雑誌の中核を担った岩波書店の『世界』の編集部内部と同誌に集った知識人の知的共同体の脈・形成を明らかにした。そこでは同心会の関与、共産党員であった編集部の塙作楽など別の方向性がありえたが、編集長吉野源三郎が平和問題談話会を実現する過程で、『世界』の編集方針は明確となった。海外の情報を広

く紹介し、オールド・リベラリストにも敬意を払う編集陣容、執筆者の一貫性を実現した吉野の役割を位置づけた。

(4)「多田道太郎の自由主義」では、多田道太郎が1960年代に展開した自由主義とは何かを明らかにした。それは広津和郎論を端緒とする文学から自由主義を考察するものであった。とりわけ多田の「解説 日本自由主義」(1965年)は中核を占めるもので、それは戦前自由主義の遺産をとらえるために幅広い「自由人」をも対象とする自由主義の多元的拡張の実践であった。さらに2本の大杉栄論を潜ることで、彼の自由精神の行方は、遊び論と合流していくことを意味づけた。

(5)「戸坂潤」では、彼の第一高等学校時代、京都での学究、唯物論研究会を主とした東京での言論活動に及ぶ生涯を概観した上で、これまでの哲学・思想史研究では本格的な検討がなされなかった戸坂のジャーナリズム思想を分析した。具体的にはそこで展開されるアカデミー観、アクチュアリティ、常識・日常性、批評・クリティシズムの諸特徴を析出し、「ギャング化する日本」に批判的に向き合った戸坂のジャーナリズム論の原理を明らかにした。

(6)日本史研究会の例会では、共同通信社会部デスクの原寿雄が、小和田次郎の仮名の下で1963年から1968年までのジャーナリズム内部の編集過程を詳細に綴った『デスク日記』を通じて主に新聞社の内部と外部に即した言論力学を考察する報告を行った。

(7)これら以上の研究を通じて「戦後京都学派」の中心人物である桑原武夫と多田道太郎の思想史研究を掘り下げ、戦後日本の論壇における「戦後京都学派」のユニークな立ち位置と論者の思想の解明について先鞭をつけることができたといえる。またジャーナリズムと知識人の間に生まれるダイナミズムに関して総合雑誌を媒介にした知的共同体の形成過程を即して考究した。

(8)今後は知識人だけでなく、ジャーナリストの思想を通じてアカデミズムとの交渉を含めた言論力学を明らかにしていく必要がある。そのことでアカデミズムとジャーナリズムの社会の在りようや歴史像ならびに、戦後日本の言論と知識人・ジャーナリストが担った公共圏の意義の解明が期待できる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

根津朝彦、桑原武夫の思想形成 幼年期から京都一中時代、京都大学大学文

書館研究紀要、査読有、12、2014、1~18

根津朝彦、『世界』編集部と戦後知識人的共同体の生成をめぐる、メディア史研究、査読有、34、2013、41~64

〔学会発表〕(計1件)

根津朝彦、原寿雄が残した『デスク日記』に見られる言論力学、日本史研究会例会、2014年6月14日、機関紙会館(京都府京都市)

〔図書〕(計3件)

出原政雄〔編〕、法律文化社、戦後日本思想と知識人の役割(根津朝彦「多田道太郎の自由主義」を担当) 2015、403(179~202)

赤澤史朗・北河賢三・黒河みどり〔編〕、影書房、戦後知識人と民衆観(根津朝彦「桑原武夫の戦後思想」を担当) 2014、373(179~218)

安田常雄〔編〕、有志舎、講座東アジアの知識人第4巻(根津朝彦「戸坂潤 ジャーナリズム論の先駆者」を担当) 2014、396(122~140)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

根津朝彦(NEZU, Tomohiko)

研究者番号: 70710044

(2)研究分担者

( )

研究者番号：

(3)連携研究者  
( )

研究者番号：